いに自重し、大いに努むるところなかるべからざるなり。

山東旅行記

七月十一日

今度我が校に於ては、はる〳〵と極東の要鎮たる支那山東の一隅を訪問して、大勢の轉回圖を一眼の下に眺望し、廣き見聞の中に深く内に顧みようとする大旅行を企てられた。まことに、今は世界を外にして國家はない。我等將來の國民教育に當る者の又ゆくべき旅行ではあるまいか。大きな旅は大きな人をつくる。

いよ〳〵午後八時東京驛出發。一行は矢部先生を團長に二十餘名。

「お身御大切に。」「先生、先生」の聲を後に殘して汽車は徐徐と進んでゆく。いよ〳〵青島旅行の第一歩は初まつた。試驗はすんだばかりで、後には何の物思ひはないし、前には、女ながらも、御國離れて何百里の彼方の地を踏み分けようといふ希望は輝いてゐるし實に我々は意氣揚々たるものであつた。仰げば、空には眉のやうな月が懸つてゐる。青田には蛙の聲も聞える。やうやうに落ちついた靜な心にゆきゝする樣々の思ひ、今更ながら、聖代のかたじけなさ、師の君初め、當局の方々の厚き御心づかひの程を思つては、深き感謝の思ひと共に、我等の責任の重さもひし〳〵と身にしみる。その中に我が家の人々のなつかしさも、淡い淋しさとまつはつてくる。聖人に夢なしといはぬばかりの土屋先生のうまゐ、枕一つにうつら〳〵と兩方から倚り合ふ共同生活、正々堂々たる山川先生のおやすみぶり。眠い目に俵のやうな枕のやりばを持て餘す人、樣々の中に汽車の夜は更けてゆく。

七月十二日

寢苦しい一夜が明けると、又朝の混雜が始まる。名古屋驛の洗面所では、顏の石鹼を洗ひ落さぬ中に發車のベルが鳴る。「山川先生と成田先生のお餅の引つ張り合ひに一同腹を抱へる。こんな賑かな中に、十一時十五分三宮驛に着す。藤林、鈴木、阿部、岡田の卒業生諸氏に導かれて一同神戸女學校にゆく。風はます〳〵烈しく、船はいよ〳〵出ぬ事にきまつ

た。不幸か幸か、一行は此處で懇なる御もてなしに我が家のやうな一夜を過す事が出來た。我等が爲にそろへられた寄宿の方の赤い鼻緒の下駄はいて、溫泉に行つた事も忘れないものである。今朝曉もほの暗い四時といふに豊橋驛で櫻蔭會員の方の御迎へを戴いたのを初めとして、こゝにいまこの御世話をうけるなど、旅に來て、しみじみと、同窓の友の暖さ母校の力の偉大さを知つた。

七月十三日

午後四時出帆の船を待つ間を、神戸市街を見物し湊川神社、須磨寺を訪れて、遠く昔を偲ぶ。關西旅行は半はこした氣もするとの聲も聞える。風が船を止めれば、それを利用してこの見物、自然に打ち勝つ愉快さ限りなし。

何のかんのと手間取つて二時半ランチにあわたゞしく馳せつける。船は日清戰爭に由緒ある西京丸。一同便乘の三等室の吊棚に荷物と共に陣取る。百尺の脊丈に三尺の大井、六尺四方に六人の詰め込みやう。綱を操る音にも、錨をあげる音にも胸はおどる内には人樣々に、それ〳〵の思ひはあふれてゐようけれど外は見渡した所、我々は、穴藏の荷物と同樣にすぎない。出來るだけ安價のうちに航海させようとの親切から三等室は造られ、上等室は之をのぞむものに、相等の賃金を拂はしめるかもしれない。しかし、社會にあの美しい上等室と、この穴藏にゐる人々の別のある事は、目前の事實である。船中は小さな浮世である。浮世はなれて、すべて同じ寄宿舍に、一つ學校に通ふ人ばかり見てゐる目に先づ社會階級の差におどろく。海上は平穩で一同大元氣であつた。人知れず、金盥やお咒ひやと心配した人も、待てば海路の日和かな、とも、案ずるよりうむが安し、とも活然大悟した事であらふ。夜は、蚤取り粉にまぶされて赤毛布にくるまつて寢る。

七月十四日

朗かな夜は大間岬の邊であけた。今朝は宇品に寄港する筈なので、起きるとすぐに上陸の仕度に取りかかつた。食堂は、白木のテーブル、鹽水のやうなねぎのお汁お皿には、鹽鱒を刻み昆布一番美味なものはお茶であつた。やがて蒸氣船で宮島見物にゆく。こゝでこの地名物のおしやもじを、葉書にかへ

て、故里や都の空に音便して興じた。一行におくれた校長も、宇品から乘船せられて、すでに西京丸甲板上に我々の歸りを迎へられたので、一同ます〳〵元氣づいた。甲板上ではすぐ、谷田陸軍運輸部長の鄭重な御挨拶があつた。この日から特別の取扱ひで一二等甲板に上る事を許されて、一同俄一等船客で威儀を正して穴藏から這ひ上る。島にかくれる夕陽は美しいものであつた。日が落ちれば、島も海も淡く暮れてゆく。かの島の灯も雲間にかゝる五日月も皆淡い。淡い愁は自ら湧いてくる。家のなつかしさ人の情のうれしさ、自然の大きさなど、旅は人に交り景に接し、地理にも歴史にもあらぬ幾多の人生の教訓を含む事であらう。

七月十五日

今朝早く關門海峽を通過するといふので四時頃から甲板へ上つて、幸にも遇然御一緒になつた山崎直方先生に遠慮なく實地教授を御願ひする。まだほの暗い海面を吹いて來る風が冷え冷えと身にしみる。明け行くまゝに本州と九州との地は次第に迫つて、いよ〳〵巾六百米といふ最狹の部分に入つたのは六時頃であつた。すぐに山を背負つた下關の町が右手に見えて來た。「あれが春帆樓」「あれが赤間關神社」と指される指先を眺めて居るうちに何時か左に門司の家並が數へられるのであつた。兩港の眞中頃へ錨を下した本船から小蒸氣で八時門司上陸、町の一角を歩いて、先づこれで九州の土も踏んだと始めてのものは滿足して連絡船で下關に着く。

櫻蔭會の皆樣のお世話で船中二日間の汗垢を流す下關高等女學校長及び櫻蔭會の五名の方々に見送られて、午後一時いよ〳〵御國を離れて遠く乘り出す事になつた。あゝ船は日清戰役に由緒ある西京丸、行手は青島旅順の地、今や我々は對馬海峽を經、玄海灘の波を蹴て、その地に向はうとして居るのである。次第に遠ざかつて行く日本の地を山を見かへる我々の胸中には「御國」といふ一言がひしと思はれて御國の爲めならばと誓ふこゝろは感激の涙となつて溢れるのであつた。「眞に日本の國を愛せんと欲するものは先づ日本の國を去れ」と叫ばずには居られなかつた。

そろ〳〵船が搖れ出して來た。今まで元氣よく校

長先生を取り圍んで詩の御講釋を伺つて居た皆も、上甲板から一人去り二人立ち、「これだけが優勝者かナ、御褒美をあげるから部屋へお出で」といふ校長先生の御言葉でコーヒーに御煎餅の御馳走に與つたものは六人ぎりであつた。其外は動搖の少ない眞中頃の階段のかげにうづくまるもの、いちはやく底の三等室へもぐり込むものなどであつたが、それは單に用心深かつたまでゞ女傑たる體面を損ずるものではなかつた。殊に上下に搖れる甲板上で自疆術の教授をした一人の如きその粹といふべきであらう。夕方は殆ど元氣恢復して再び上甲板で舞へや歌への一と騒ぎ。今日の玄海灘の對抗力の採點が始まる。校長先生から滿點を頂いて一人が得意がれば、夕食をぬきにしたからと五點ひかれて一人は口惜しがる。誰かは君は「四十點」と頭から落第するものもあつた。このさゝめきのうちに暮れて行く空と海、その遙かの果てに見えた壹岐の島かげも共にうすれ行くのであつた。

夜は一等食堂で茶話會を開いて事務長の航海談に樂しい時を過す。

七月十六日

六時頃起き出した時、左舷に巨文島が迫つて居て波はもう全く穩かになつて居る。多島海にさしかゝつたのだ。目の前にあらはれては樣々に形をかへて行く無數の島々は、我等一行を送り迎へるかの樣。十二時半梅加島を見納めに、西京丸は陸の片影もない大海に浮ぶ事になつた。水を蔽ふ空、空を浸す、水、共に果てしなくひろがつて居るこの大自然の唯中を、船はひたすら進んでゆく。行手を遮る何者があらう。唯希望と喜びとに滿されるのであつた。

かくして、船の最後の日は暮れようとしたが、珍らしい女學生の旅行團を迎へた西京丸の船長其他から舞踏をと懇望されて是非なく甲板へあがる。先づ二三年のポルカセリアス、唯さへふらつく足もとが船の微動を受ける覺束なさ。四年のダンスは震動に應じて見事に跳ねてのけられた。最後に山川先生の號令でどうとう體操が始まる、めでたく御茶の水の本領を發揮して時ならぬ甲板上の賑ひも終つた。「明日は青島よ」と意氣込む心を強いてほゝゑみにして眠りにつく。

七月十七日

黄金色に明けてゆく彼方の空、峨々だる嶗山を中心に左右に連なる藍色の山々、何れも乘客に航海の果ての日の喜びを告げるものであつた。どの甲板も晴れ〳〵とした顏と聲とでみちて居る。山の皺まで見える樣になつて來た。我々は今目の前に展開さるべき何者かを瞳を凝らして待つて居る。「まあきれい！」と一人から起つた歎美の聲に見れば何といふ美しさであらう、ゆるく〳〵起伏して居る綠の丘のむつくりと鮮かな色の中に、見えつかくれつ點在する赤い屋根の家、その色彩の美と、異國の情趣とが我々の目をすつかり喜ばしたのであつた。船は滑る樣に青島灣に入つてその沖合に碇泊した。ふと振りかへれば、何時しか岸にならぶ大厦高樓、空は蒼く水は靜かである、我々は一度に繰り廣げられた異國の名畫に、今は聲もなく吸はれてゆく。すべてがまだ曉の眠りから覺めない樣なこの靜寂、この美しさ、繪でなくて何であらう。あの中にあはたゞしい人生の營みがあり、忌はしい爭奪があらうとはどうしても思はれぬ。

船では檢疫が始まつて居る、ボーイが總がゝりで三等の船客を整列させて居る。「もし〳〵六列ですよ」とどなられる時は一寸重つても、すぐくるりと後を向いて「いゝのね」と歎聲を發し出す。型の如くに豚の檢査も終ると船は青島灣を出ていよ〳〵膠州灣へはいる。大港の埠頭へ大軀を横へたのは九時頃であつたらう。廣い波止場に群る出迎への人々は何れも自分の友達を探しつつも、新らしく、或は久しぶりに遙々訪れた同胞のために帽子を振つて居る、何とも云へぬ涙ぐましい光景であつた。今年御卒業の佐々木さんを交へた袴の一群は確かに我々の、と心强く遠くからほゝゑみを交はす。

名に負ふ苦力にも始めて御目にかゝる、その汚い事と多い事は豫想以上であつた。そしてその騷々しさは實に巢を追はれた蜂の鳴動である。船と陸との連絡がつくと。その鳴動が船へ移つて荷物を奪ひ合つて行く。我々の荷物にその手が觸れるのを見た時ゾッとした。彼等を見ては人道の叫びも頭を引き込めずには居られなくなる。かくて一行は無事に第一の目的地を踏んだのである。まだ夢心地でたゝずん

で居る我々を乘せて、自動車は何處へとも知れず駈け出す。廣い道路、立派な建物、アカシアの並木、それ位な事が頭の中でまごついて居るうちに、葛の高く這ひまつはつた民政署なる建物に下される。こゝでいろ〳〵の印刷物をいたゞいて、早速見學の第一歩を踏み出す。

先づ程近い第二小學校を訪れる。この邊は全く外國の趣きである、勿論さう推量するだけであるが。殆ど人の通らぬ並木かげを時々白いスカートの裾も輕げに彼の國の婦人が行き過ぎるのもふさはしい。今は露西亞人が多いさうである。第二小學校といふのは、獨逸のものをそのまゝ分捕したので建物の立派で完全して居ることは勿論、標本、地圖等の精密と正確とは到底内地に得られぬ。今はこゝで頑是ない日本の兒童が學んで居る、幸福に似て不幸である多く滿州蒙古邊からさすらつて來た家庭の良くない家の子女で、殆ど本國を知らぬさうである。尋常三年の讀方を參觀したが鯉のぼりといふ處をならつて居た。「天子樣のいらつしやる處、みなさんの御父樣や御母樣の御生れになつたお國」と内地の子が先天的の如くに承知して居る日本の國といふ觀念を與へるだめに、先生が熱心に敎へられるのを、あどけなく小首をかたむけて聞いて居るのを見ては、涙を催さずには居られなかつた。こゝを辭すると恰も正午の日盛り、勞れも出たので車にのる事になる。何しろ大勢だから容易に集らぬ。チョラヨー〳〵と遠くの仲間を大聲に呼びあつて、やつと揃つたので、氣味惡がりながら裾をつまんで乘る。それとも知らず苦力は人のよささな顏をニヤ〳〵させて居る。苦力の體格の立派さと、皮膚の色のよさに後から感心して眺めて居るうちに、高女の寄宿舍へ着く。これも立派である。我々の部屋にといふ廣間は一目に町を見下した、そして絶えず涼しい風の吹いて來る氣持のいゝ部屋であつた。午後から再び自動車で戰跡巡り。何といふ贅澤な事であらう。その優遇をほんとうに感謝しなければならぬ。幾里かの道を疾走して金泉岬砲臺を見、更に、旭山のイルチス砲臺へ飛ぶ。途中は壯また快、道に連る綠の幕、綠の風にかほる綠の香、葉のそよぎも希望のそれか。歡樂盡きてとやら今はため息をつくのみであつた。日本のも

のとなつてから移植したといふ櫻大路の葉櫻も可成長い間幾多の目を喜ばせた。青島は町そのものが公園である。

歸るや否や、櫻蔭會の方々の歡迎會にと青島一流の支那料理臨風閣からの御使ひ、休むひまもないとはうれしさをごまかす手段、元氣よく出かける。支那町へ出ると何ともいへぬ臭氣が鼻につく、しかし、白や水色の裾をゆるやかにひらめかし、廣い團扇片手にゆら〳〵と涼んで居るのもいゝ趣きである。

「よくいらつしやいました。」とあやしげな日本語で慇懃に腰をかゞめる主人の前を二階へ通されるともう澤山のにこやかなお顏がお見えになる。三つのテーブルに程よく分配されて着席する。桐谷女學校長、東山教頭も見えられた。始めは意氣込んで盛に箸を動かしたが、無盡藏の樣につぎ〳〵と出るのでしまひには恐縮してしまつた。何でも三十品近くあつたらう。何れも〳〵美味なこと、一品でもよいからしまつておいて他日復たべて見たいと思つた。だから余程思ひきりがよくなければ箸をつけずにしまふことはむづかしい。支那料理の進歩して居るのには實に感心した。唯みんなが一つ御皿に箸を突込むのと、骨やからなどをテーブルの下へ投げ捨てることたけは一寸躊躇された。

美味に醉され歡を盡して惜しい暇を告げたのは十時半であつた。

十月十八日

青島の第一夜は明けた。晴れた空の下に美しい町が昨日の如く横つて居る。今日の豫定を遂行すべく先づ屠獸場へ出かける。いたましい血の色をよくもあんなにしげじけながめて居られたものだと、あとで考へられた。次には下水嘔筒所へといつた。全市の下水の汚物がこゝで濾され、すくひあげられるのである。實に汚物の粹を集めたとはこのことで臭氣紛々たるものがあつた。かくして、下水は再ひ上水となつて流れるのである。ドイツではこの汚物を乾して肥料に用ひるさうである。彼等の前に捨つべき物は何にもなからう。下水工事の完全といふ事はたしかにその國の文明の程度を卜するに足るものである。この工事は獨逸の設計を受けついだものに過ぎぬ。我が帝都には、市中を流るゝ河に汚水の注ぎ込

むのを到る處に見受ける。

一體獨逸の力は何處まで伸び得たものだらう。僅か十七年に、一漁村をして今日の青島たらしめて居る、しかし苗を植ゑたアカシア、プラタアヌスが青々と茂り合うた頃、これらすべてを奪はれねばならなかつた。わが國民は適切なる實物教授を與へられた獨逸に對して感謝すると共に大いに學ぶ處がなければならぬ。

公學會では、巧みに日本語をあやつる支那學生に感心し、ついで高等女學校を訪れる。そしてこゝから軍司令官々邸に車をつらねる事になつた。ワルデック總督の官邸の跡で、宮殿の如く莊麗である。二百萬圓を投じたこの建物は獨逸ですら一時議會の問題になつたさうである。廣い邸内を隈なく拜見した後、食堂で長官閣下の御馳走にあづかる。宴の半ばに長官は我々のために懇な御挨拶賜り、且つ青島の施政並に教育の方針の大要を示されて我々の一考を促された。かくも親しい御教訓を身にあまる光榮と難有く承る。今後日本人の活動すべきこの新しい力の溢れた土地の教育こそ、眞に興味ありまた働き甲斐あるものであらうと、少からずみんなの心はそゝられたらしい、殊に青島のすべてが氣に入つて居るのだから。廣島高師の生徒の挨拶についで四年の岩田さんが總代として簡單な感想をのべて御答とした。五時頃また自動車で歸る、「こんなに自動車で乘りまはすのも一生の思ひ出だ」と誰れかがうれしさうな悲しさうな聲を出す。

夜の町はまた美しい、地上の星のまたゝきに誘はれてぞろ〳〵と町へ出て繪はがきを買つて來る。

七月十九日

夜更けて降つた雨の名殘りか、しつとりとした、アカシアの梢、綠の色ことに鮮かに夜が明けてゆく。

繪ハガキだの「支那」の文字を摺り込まれた切手やハガキが買へた嬉しさに今朝は皆手紙書きに餘念もない。

「御早う。」と男の先生方が這入つていらしつた頃には日中の暑さを思はせる樣な强い陽が赫と照り込んで海の色も輝いて居た。

今日の第一歩を先づ程近い第一小學校に向ける。

第二小學校に倣つて日本人の手に建てられたもの。既に第二を見た目にはさして驚かれもしなかつたが内地に比べたらこれでも小學校かと思はれる程立派である。二階には純日本式の大きな作法室が出來かゝつてゐた。廊下のゆきゝ階段の昇り降りに往き逢ふ愛らしい生徒達、紺絣に小倉の袴キリツとつけた男の子も、緋のリボン美しい女の子も内地の小供と少しも變りはないが河となく心惹かれた。物珍しげに私共を見上げて居る者もある。母國から來たといふ私等が無邪氣な胸にどの樣な響きを傳へたか。日程表には次の卵粉會社の名がある何をする所であるか一寸想像がつかなかつた。門を這入ると直ぐに案内された第一室には殆室の半分を占めて居る大きな湯ぶねの樣なものがあつた。「此所で鷄卵を發酵させます。」と案内の人は被ひを取り除けながらいつた表面は半ば灰色に黴びて居る。摺粉木の樣な棒を動かして見たら黑みを帶びた黄色の液がトロトロとかゝつた。斯うして發酵したものをゼラチン狀に乾燥しさらにこれを挽いて白砂を鼈甲色に染めた樣な粉を作るのがこの會社の仕事である。卵粉には卵黄ばかりを粉にしたもの、卵白ばかりのもの兩方、を混合したものゝ三種がある。これに一定量の水を加へて攪きまぜれば何時でも普通の鷄卵と同樣に用ゐられるとのこと。元來支那には鷄卵が豊富で從て廉價である。これを不變に貯へ、又遠隔の地にも容易に送り得る方法が斯して完全に行はれてゐる。その珍しい進んだ思ひ付きには只目を瞠るばかりであつた。多くの支那人が石臼を挽いたり粉を箱に詰めたりして働いて居た。

東和油房、鈴木糸敞を驕て其の事業組織の廣大なのに驚き、魚屋も八百屋も乾物屋も小間物屋も日本人の店も支那人の店も觀工場の樣に軒を並べて居るマーケットプレースでは生肉や乾肉を並べ立てた肉屋を氣味惡がつたり矢部先生の御野菜の御説明に興がつたりした。午後は戰勝記念碑を訪ふ。海に面して小高い所に立つてゐるこの碑は支那から青島を奪つた記念に獨逸の建てたもの。千代萬代に殘れとて見上げる大石に彫り込まれたる勝利の辭の上には、大正三年十一月七日の金文字が輝いてゐる。記念撮影の後、校長先生は講演の爲め階行社へ、一同は洗濯

會社の參觀に向ふ。折惡しく休日で大仕懸な機械は運轉を停めて居たがその規模の廣大、設備の完全な事、嘆聲は屢洩れた職工は獨逸人經營時代から引き續いてゐる支那人が多いとのこと、奥の一室では急ぎの仕事か數名が馴れた手でワイシャツボン下にアイロンをあてゝ居た。

草いきれのする稍遠い道を引返しながら私はしみじみ思つた。これが日本人の頭、日本人の手で出來たものであつたらどの樣に嬉しからうと。今日一日を考へても大きなそして精密な事業は皆獨逸人の頭によつて創められたものだ。日本人は只其後を續けて居るに過ぎない。精巧な機械も一つ一つ皆獨逸人の手に成つたものだ。當地に上陸したそも〳〵のはじめから見る度聞く度殆すべてのものに驚嘆しつゞけてゐる。まだ〳〵我國などは遠く及ばぬ點が澤山ある殘念でも無念でも數段の差は明かに認めぬ事は出來ない。倣つて建てたといひながら何處となく不堅實な感じのある第一小學校は確かにこれを實證して居るではないか。前途は遠い、しかも全東洋は我肩にかゝつてゐる。我國の使命は重い、眞に我國は難局に立つて居る。御國自慢や獨り强がりで得意になつて居るべき時ではない。大戰後の世界を思つた時私は寧ろ平和の來るのが恐しかつた。

態々御都合下さつて櫻蔭會の御姉樣方が夜の市中を見せて下さつた、御土產買ひ集めながら樂しい時を過した。

七月二十日

歡喜と驚嘆とに包まれて青島の三日間は過ぎた。今日はもう別れを告げなければならない。舍監の先生や奥樣、可愛らしい御孃樣などに送られて七時、寄宿舍を出る。上陸以來の筆紙に盡せぬ御心づくしを今に臨んで何と御禮申上げやう。母國を離れて八百海里、殊には心弱い私共に旅寢らしい不安も知らずよろこびの目を瞠つて樂しい時を過させて下さつた櫻蔭會を初め當地の皆樣の温い御まこと。四日の後には又歸つて來るほんの一時のと思ひながら何といふ殘り惜しさであらう。すつきりと立つたなつかしい寄宿舍も幾度か見返へられた。三階の窓に置かれた鉢植ゑのアジサイがいつまでも見えてゐたのも忘れがたい。

青島驛には櫻蔭會の高田、坂栗、富岡、佐々木の諸姉をはじめ青島高女の先生方が既に御待ち受け下さつて何かと御世話下さる。手に手に大きな荷物を提げた支那乘客に雜つて改札口を出た。民政所軍司令部等の方々新聞記者などでプラットホームは賑つて居た。

「御水を召し上るな。」「御暑さがひどいそうで御座いますから……」いつもながら御姉樣方の御やさしい御心添へ、何といふ嬉しい心强いことであらう。御情けの御手に守られて私共の旅は幸福に續いて行く。

丈の高い幅の廣いゆつたりとした山東列車の乘り心地、室隅に欺め込まれた瓦斯燈形で煙突のついたラムプが面白いといつてスケッチしたり、窓側に方一尺五寸程の車内デスクを見付けて引き出して見たりして興がつた。

汽車は膠州灣に沿つて北西に進む。人のたけよりも遙かに高くすくすくと延びた高粱がかつきりとした日ざしの下に果もなく續いて居る。遙かの遙かの彼方に丸い形をした山が一つ、汽車はそれを目がけるかの如く走つてゐる。カランカランといふ音に驚いて下を見る。鐵橋の下に水の見えることは殆ない。水のない河は支那には珍しくないと矢部先生の御話。あれが城陽の東城と指し示しての御注意にはじめて支那固有の縣城なるものを見た。彼の田單火牛の計に名ある卽墨城の史蹟はこの附近である。「赤色の衣五彩の龍紋。」など史の語を思ひ浮べながら戰國の昔を思つて見たりした。車中、簑田守備隊大尉から山東鐵道沿線地に於ける我守備軍の配置を中心として山東一帶の人情風俗、我政府の施政等に關して興味多い御話しを承る。殖民地の經營、殊に他國の後を受けての經營には當局者以外のものゝ想像も及ばぬ所に大きな苦心のあることを知つた。

既に山東平野に出た。西へ西へと進む。所々、黍や豆の低い畑をまぜて高粱の畑は依然として續いて居る。土で固めた樣な低い家の並んだ支那人の農村が見えることもある。「あれが槐樹、これは牌門、今飛び立つたのは漢詩に重要な景物の鵲。」などゝ矢部先生の細い御說明に感じ入つて窓を離れず黑い顏を益々黑くした。暑さの我慢はさることながら喉の乾

くには皆苦しんだ。御茶を賣りに來る筈もなくサイダーやシトロンの樣なハイカラなものは勿論ない。生水の絕體に飲用の出來ない此の邊では大きな驛には蒸氣釜の樣なものが備へてあつて御湯が一杯に沸かしてある。列車のボーイが特に私共の爲めに汲んで呉れる僅土瓶に一杯か二杯のその熱い熱い御湯を汗を拭き拭き飲んだ。少し長く停車する所では下車してプラットホームを歩いて見る。校長先生の後について驛長室に這入つて御話を承ることもある。他の乘客達が窓からぢつと見て居る。この我まゝな氣樂な旅行者達を何と思つて居ることであらう。

驛々の名も面白いが賣りに來る品物が隨分變つてゐる。梨瓜、天津桃、肉曼頭等は珍しくもないがアヒルの丸燒きなどは初めは何であるか思ひ付かなかつた。一羽のアヒルの羽と皮とを取つて頭も脚も着いたまゝを照り燒きにしたもので焦茶色にピカ〳〵光つて居る。見るさへ氣味惡く思はれるが支那內地を徒步旅行する時には最もよい食料だと校長先生はおつしやつた。

氣のせいかだんだん暑くなる。袴の腰もしつとりとする程汗ばむだ心地惡しさ、それでも坊子驛の驛長は近年にない心涼しい日といつて居られたとか。坊子は炭礦で名高く、彼のリヒトホーヘンの發見後獨逸これが開礦に着手するや先づ太子の臨塲を得て盛な式を擧げたと傳へられてゐる所である。張店は博山支線の分れる所で日本人の移住者の多い所。博山は硝子細工で有名である。名物の糸硝子の屏風を張店驛通過の際に注文することを得て、珍しい御土產が增したとて一同大喜び。

五千年の歷史を持つ支那の內でも山東の開明は最古い。一山一水と雖史實に物語に名のあるものばかり。東中山東の研究者として有名な田中逸平先生に偶然御會ひして趣味多き御說明を頂いたことは何といふ幸であらう。歸りは夜をも計られぬ、生涯に二度とはと思へば一木たりとも見過しがたい心になる。二時三時の日盛りにはさすがに暑さや疲れやらでぐつたりとして空氣枕に溜息吹き込む人も多かつた。

長い日脚も落ちかゝつた頃、濟南に着いた、思つたよりも賑かな驛。然し私共を待つた一つの笑顏さ

へ見られない。着くといへば必ず迎へられ歸るといへば必ず送られて昨日までも勿體ない御大名旅行に馴れて來た私共には何といふ物足りなさであらう。寂しく下車した時、只一人支那服を着た日本の人(さう思つた)が言葉やさしく迎へて下すつたのは嬉しかつた。後にこれは我國に八年も留學された山鐵社員の唐鎭業氏なることを知つた。

鶴屋ホテルの小旗を立てゝ迎への車はもう揃つて居た。濟南だけは支那の宿でとは豫てよりの御申渡し。どんな所に連れて行かれるか、鶴屋ホテルがいろ〳〵に想像される。人の不安を知らず顏に此所でも苦力等は騷々しい高聲をあげて走る。大きな看板の立ち並んだ支那街には黃色い埃が揚つた。

七月二十一日

餘り暑いので飛び起きた。二重窓の外側を明けると氣持のいゝ朝風がすつと流れ入つて墨繪の白蚊帳が靜かに搖れる。手拭下げて洗面所への廊下を歩みながらも心はまだ夢かと疑つて居る。何といふ思ひがけないことだらうこんな立派な、しかも日本人のホテルが私共の爲に廣い室を幾つも明け、きれいな風呂を用意して待つて居て呉れやうとは。大きな姿見の前に立つて御湯を出したり水を出したり、何だか遊山に來たやうな氣分がした。

昨日以來この濟南行きに加つていろ〳〵と便宜を計つて下さつた山東鐵道社員の松永氏の他に青島守備隊の海軍將校も亦一行に加られ今朝は賑かに二十數臺の車を列ねて市内見物に行く

「黃河の老稱濟河の南にあり以て濟南と名付く山東省の首都にして又遠く數千年來の舊都たり。」と案内記に書かれてゐるこの市は純支那式の如何にも舊都らしい所に價値がある。支那に來たといふ氣分は此所で始めて深められる。青島を飾るものはすべて新しい文明である濟南のそれは其の數千年來の過去である歷史である。彼に希望の光があり力があれば此れには追想のなつかしみがあり奥ゆかしさがある青島と濟南、それは頗る面白い又一面皮肉な對照である。こゝをして夙に名をなさしめたのは一つには支那には稀に見る豐富な水脈による。濟南を見物するものは先づ市内隨所に湧出する清泉の愉快を味ふ踟突泉は其第一に數へられる。我々はまづこゝに車

を停めた。三つの泉から透き通る樣な水が波紋を作つて湧き上り河となつて流れてゐる、これが濟南城の西を守る護城河である。傍らに一宇の立派な御堂があつて呂祖廟といふ。泉を祀つたものと思はれる。此の邊、商賈軒を並べ恰も淺草の仲見世の觀がある。更に南に進んで廣知院、東文學校の參觀後、千佛山に向ふ。廣知院は宣教師ホワイトライト氏の創設にかゝり布教を主とする教育博物館で千佛山は帝舜で有名な歷山の別名である。

道は次第に登りとなる。車ごと倒されるかと心配したりゴム輪が破裂しはすまいかと氣遣ひながら盛に車上運動をしてゐたが苦力達は無頓着である。どんな所でもぐんぐん進む。いよ〳〵道が狹つた時、車をすてゝ歩き初めた。暫く行つてふと見返つた時に私は思はずも立ち止つた。まあ何といふ快さだらう。はる〳〵と開けた山裾の一大草原、はるかに見える山影は泰山の脈つづきか、笞も持たずに一人の牧童がゆく。一群の山羊は彼を圍むで靜かに歩いて居る。閑寂、悠久、靜和、この氣分を表すべき適當な言葉が見當らない。そして又何といふなつかしい自然であらう。私はいつまでもこゝにぢつとして居たかつた。「歷山の下に耕す。」とあるのは此の邊に違ひないと獨で定めた。登つても登つても盡きない石段に飽き飽きしてしまつた頃、岩に彫り込んだ澤山の佛像が見え出した。千佛山の名もうなづかれる。遠來の珍客でも何でも濟南の暑氣は少しも容赦しては呉れない數千年來の毎夏の例によつて照りつける。誰も誰も顏は火の樣。一段一段運ぶ足のその重さ。堯も舜も如何でもいゝと思つた。物をいふ人もない。口をキットと結んで此所暫く我慢の競べ合ひ一人も弱い聲を出さない内揃つて頂上に着いたのは目出度極みである。然しこの苦業によつて我々は一躍、仙人になり得た。仙界には絶えず獨特の涼風があるこれに浴しながら下界を指呼する心地よさ。あれが内城外城と濟南全市は直ぐ脚下に手に取る樣。遠く眼を放つては蜿々たる黃河の聞きしにまして黃色いのに驚く。黑い線のなが〳〵と續くは有名な鐵橋である。

下山の途に珍しいものを持つた一人の男に行き逢つた。目ばやく御見つけになつた矢部先生が早速借り受けて說明して下つたこれは支那の昔の戰ひには

なくてならぬ弩であつた。男は得意顔に二度も三度も射て見せた。

再び車を列ねて黒虎泉に行く。太公望の釣魚臺で名高い高い城壁の下を稍青黒い色をして流れてゐる。岸に布洗ふ少女があつた。十二か三か。其の子がやさしい口調で頻りに何か話して呉れる。私はうなづき聞いて居た勿論何も解りはしない。けれどもこの親切な心を失望させ度くなかつたから。車夫を叱ることは兎に角、私はこの子と話す爲めに唯一言の支那語が知り度かつた。

太明湖は蓮で青くなつて居た。湖上には幾艘かの畫舫が裝ひ美しく浮んで居る。載月といふのに乘つて香りのいゝ支那茶を賞美しながら暫の風流を味つた。此の邊の上流人士の夏宴は斯うして湖上に開かれ管絃等を樂しむことが多いとか。

内城の大通りに入つて商賈の狀況を見、商埠公園を最後に今日の豫定を終へた。宿の風呂に快く浸りながら今日一日でかなりな支那通になりすました氣のするのが我ながら可笑しかつた。

夜は八時から、御招待によつて領事館に行く。露臺に立つて隈なき月に對せば二千里の外も偲ばれて覺えずも涙は頰を傳つた。御丁寧なる御挨拶を頂いた後、田中先生から山東省に關する興深き御話しを承つた。何時の間にか御用意下つた華かな食堂で久しぶりに冷いものゝ御饗しを嬉しく頂いた。あつい〳〵もの以外は望むことも出來ないこの土地ではこの上もない贅澤である。

七月二十二日

泰山登りだ。と思つて勢ひ込んで床を出たがいつになく曇つた朝。手紙を書いたり、萬年筆のインクを新しくしたりすることに手間取つて、二日間の用意に忙しい時を過す。何のことはない旅行中の遠足である。例の車に送られて津浦線の濟南驛にはせつける。買ひ切りの一ト箱は既に待つて居た。この新しい三等車の一室は再びこの驛に戻つて來るまでの數日間の住家である。

泰安驛に着いたのが十時、驕子の徵發に時間を費したのでいよ〳〵登山にかゝつたのは正午過ぎでもあつたらうか、裸體、蹄の大男に左右から駕籠を突きつけられた時には餘りの不氣味さに誰も少からず躊

躇したが勇を鼓して乘つて見ればこれは又乘り心地のよい事。到底、日本の山駕籠の比ではない、丁度安樂椅子によつたまゝ擔かれて行くやう。降り出した雨も今は止んで眞黒な山の中腹には白雲がムク〳〵と立つて居た。一同元氣俄かに恢復、二十數臺を列ねた奇妙な行列は一齊に勢ひよく進んで行く、峨々たる岩根、亭々たる老樹、右手の谷を臨めば數丈の底を泡立つ水が響きもすさまじく流れて居る。登る程に千古の神氣、いよ〳〵身にしみる。俄かに驟雨がさつとしぶいて着物の袖もしぼるばかり。神山を犯す不意の進擊に、山守る女神の御怒りか。然し、登るさへ千載一遇、その上千古の雨に濡れ得るとは、と一同益々元氣を加へた。が一度ならず二度ならず驕子を停めて憩ふに及で、道はかどらなくなつた。南天門が正面の雲間に見え出した時、果然下山の命が下つた。再びと來られる所ではなし血氣にはやる我々は是非頂上までと主張したが土匪出沒のこと、暗夜に伴ふ歸路の危險等を先生方から訓されて遺憾ながら全く斷念し、一定の時間内、自由探勝の後、女子登山隊の先發たる名を得たことに滿足して殘り惜しくも駕籠を返した。中腹に蟠つて居たかの白雲は俄かに擴つて全山を被ふと見えた、再び見かへつた時にはもう何も見えなかつた。斯て我々はこの神山と永久に別れた。

泰安驛の線路上には例の列車の御宿が我々を待ち詫びて居た。新しいアンペラを敷きつめ御持參の毛布をその上にのべて御座敷はすつかり出來上つた。腰掛が周圍に少しあつて中央が廣く明いて居るのも都合がいゝ。腰掛は柵の用をする。プラットホームに降りて小孩(ショウハイ)(支那の子供)の汲んで呉れる水で身體を拭つたりしてゐる間に濟南から伴れて來た宿の人は御夕飯を炊きはじめた。

空が晴れ渡つて夕燒が遠くの森をきれいに染めて居る時に急ぐ鴉の群もそのまゝ繪である。

小孩を相手に砂に文字を書いて覺束ない筆談を交して居るうちその顔も見えなくなつてしまつた。

細長い御座敷に皆が集つた。赤い毛布の上に御皿も御茶碗も並べてチラ〳〵する蠟燭の火影に樂しい御夕飯が開かれた。

二十三日

校長先生の自彊術のかけ聲に目を醒ますと何だか空氣が變つて居る、夜の中に曲阜まで連れて來られて居たのである。孔子樣の……と考へると何となく清い心になつて顏を洗ひ邊りを歩いて見る。停車場がポツンと一ツあつてその後に驛員の家らしいのが二三軒あるだけで何もない、何處が曲阜だらうと探しても城壁も見えない、片側に構内といふしるしにアカシヤが植ゑてあるその他は例の通りの高粱畑ばかりである。

馬車が來て……それは驢馬が牽き、乘る所が高くて奥が深く三人位乘れる……二人宛乘つて出かけた。道が頗る惡いので麴のやうに車の中でもてあそばれる、可なりの時間ゆられ〳〵て體が綿のやうになつた時やつと孔子の墓所に着いた。門を入ると松林でこゝで馬車を下りる、第二の門を入ると柏の並木、左右に高弟の墓講堂等あり、その奥まつた所に白魚の墓があり最も奥に孔子樣の御墓がある、また孔家代々の墓もあつた。道がに墓所の境内は廣大であつたが詣でる人影は稀らしく思はれた。

こゝを出て顏子の墓、陋巷等を過ぎて又高粱畑の細道をゆられて下された所は泗水の邊である。赤土色の水がどろ〳〵流れて居て橋もない。馬車も人も渡船に乘つて渡らなければならない。驢馬を水中に入れて人は此方の岸で鞭をあげながら彼方岸へ泳がせてやらうとして居る。一つの船が馬車を一つと人を數人乘せてゆるり〳〵と運んで居る呑氣さ此方もすつかり大陸人になりすましてあせらうともせず時間を超越して待つて居る。彼岸は廣い砂地で沙漠のやうな感じがする。やつと渡り了へて又可なり馬車に乘つてやうやく曲阜城へ着く。

聖廟を拜觀する。その建築の壯大さ第一に驚き次にその精巧さにみとれた。中にも右の彫刻は珍らしかつた。それには石柱にくまなく施したもの石板彫等あつた。境内の一遇に孔子の舊住所といふ所に魯論語孝經等の由緒ある孔壁があつた。三千のお弟子をお敎へになつたといふ講堂に入つてみた時はそゞろに感慨の涙に咽んだ。淋しさを抱きながらゴトン〳〵と馬車にゆられて汽車のお宿に歸つたのは黃昏時であつた。

滴るやうな月夜、ろうそくは消して青い月光を浴

びながら車座になつて物語を始めた。望鄕の情はさる事ながら尙昔は聖地今は土匪の隱れ家となつた高粱畑の野續き、衰枯した曲阜の町を思つて悲痛な情に打たれないものはなかつた。

アカシアの木影に筵をしいて月に吟じて興じて居る者も皆車内に集まつて林機關少佐から船上生活についてのお話を伺つた。

曲阜の夜はあくまで靜かに更けて月は永く千古の秋を語つて居る。

七月二十四日

午前四時に寢ながらゴトン〳〵と汽車が出た。十時に濟南に着いてこゝで北京に御まはりになる校長先生を御送りし鶴家ホテルで十分休息をとる。

午後から炎熱を犯して黃河の鐵橋を見にゆく。車を下りて少しゆくと遙かに船の帆が見える。あれが四千年來の黃河と思ふと血潮が高調してくるのを覺える。粘土を溶かしたやうにどろ〳〵と流れる水、うす汚れた帆の影に無限の情を含んで居る。この邊りで山崎先生と田中逸平先生とに御遇ひする。鐵橋は獨逸人設計のもの正實に完全なものださうであつたが上つて見る事は出來なかつた、黃河も見た。鐵橋も見た、暑さが急に身にしみて來た。一つの入道雲がだん〳〵空に擴がつて遂に今にも降りさうになつた。

大忙ぎと云つて黃河の邊りの茶屋に入つた。何時のまにか西瓜を洗つて持つて來た。海軍の將校が劔を拔くと矢部先生がお器用なお手で切つて下さつたのを傍から取つていたゞく、二切三切は無中で食べた。こゝで元氣百倍して宿に歸る。雨はとう〳〵降らなかつた。

午後八時の汽車で青島に向けて出發する。領事館の方、唐鎭業樣等御送り下さる。濟南の町も人もなつかしいものであつた。

七月二十三日

朝、高密といふ驛で顏を洗ふ、立派な洗面所で而も手落ちなく準備が出來て居る。

十時大港驛に着きこゝで上海通ひの榊丸に乘る。解纜の前には青島で御世話になつた誰れ彼れが大勢見送りに來て下さつた。始めから一番好きであつた青島に別れなければならない。あはたゞしい鐘がな

つて船は岸を離れた、ヂリヂリと長い船の別れは一層物哀れなものである。見送る人も送らるゝ人も皆涙なしにはすまされなかつた。送る人は尙悲慘である、どんなに母國が戀しいだらう。二十五日は船に暮れた。

七月二十六日

午前九時大連入港。青島と何といふ相異であらふ。あの繪の樣な靜かさに較べて、ここは遠くから活き〳〵とすべてが動いて居るのがわかつた。

毎年の事ながら櫻蔭會の皆樣が喜んで迎へて下さつたのはうれしかつた。早速案内されて、豆粕板を驚くばかり積みあげた倉庫を見る。南滿洲の唯一の財源である。一枚四十斤あるといふのを苦力は六枚まで肩にのせて運んで居る。日本人では二枚以上は望まれないそうである。兩方の体格を較べた時は誰しも頷く事であらう。

埠頭から防波堤までランチで一めぐりして、電車で高等女學校に着く。今日までの休なしの旅と、暑さにすつかり疲れたので、午後は自由に休息を取る事になる。

夜は、矢部先生に連れていただいて、大山通邊まで買物をしながら町見物に出かけたが、雨に降られて、急いで歸つて來た。

七月二十七日

大連から旅順驛に着したのは。午後も三時頃であつたらうか。曇つた陽もやゝ傾いてゐる。停車場から、汽車を馬車に乘りかへて、白玉山を詣うで納骨堂にぬかづく。世界をも見下せと建てられたる表忠塔に登つて、幾多の士によつて購はれた勝利の光榮を、双肩にになつて有り難さに感泣した。この道すがら、山は、萩、女郎花、桔梗の花盛りで、細い道ゆく馬車の窓は折々花とすれあふ。夏草や武士どもが夢のあと、とか、勢力が露西亞にあつても、日本に移つても。山は山河は河、時來れば美しく花は開く。胸にその上を思ひ、目にこの樣を見ながらゆけば、歴史の變遷と自然の偉大さにいひ知れぬ思ひはわく。大きな自然から見た時私共の生命ははかないものである。而して我が武夫の死はこの地を購ひ、永久に國の光を輝かしめた。我等が小さき身も、永久に自然に抱かれた大なる人生に、何かの益になれと心か

ら祈つた。

七月二十八日

この日、汝靈山、東鷄冠山等旅順戰跡をとぶらふ。話上手の案内者に幾度か袖を搾らされたこの地に關しては、すでに、我が校に於ても毎年訪れる事であるから、こゝで說明はしない。まことに此處に來るものは感謝にあふれ、又何か決心を誓ふ事であらふ。

實際此處に來て感ずるものは、國家主義と軍國主義の勝利である。力と劒の賜を目前に見る事である。個人主義とか自由民權思想とかも、此處へ來ては小さくなつてしまふ。外見、風光明眉、建築莊麗の中にありながら此處に住む人は、内地の人よりはるかに剛健な思想を以つてゐるし、又、學校教育も非常に嚴格であるとか。次に知るのは、日本國民が健氣に世界に對して奮鬪してゐる事である。悠々たる支那大國、獨逸の席を立つて未だぬくもりのさめない青島を視てこゝに來た時日本は健氣だと先思ふ。丁度、三尺の童兒が意氣を以て七尺の大人に向ふといふ感がする。

しかし更に思へ。机上の空想は、目前の事實に於てその影を失ふとはいへ、目前の事實にばかり引かれる事なく、更にこれより一歩退いて、或は更に一段高い所からこれを見る、といふ事も亦必要な事ではあるまいか。軍國の權威盛な所に來て、更に或は宗教觀、或は理想論の上から考へる餘裕も持ちたいものである。只戰勝に感激する丈では、アレキサンダーやナポレオンを批評する事は出來ない。勿論戰ふべき戰、取るべき土地は取るべきであるけれども、我々は、日本國の存在が更に進んで世界人類の意義あらしめ、日本の發展が世界の幸福となるといふ大きな目的の爲に努力したいものである。權力と劒とのみ賴んで常に自分がと思ふ時は、我々は獨逸の轍を踏まぬとも限らぬ。

七月二十九日

午後零時、大連驛で、旅順から汽車をのりすてて買切りの電車で、大連市街を見物し、星が岡公園に遊ぶ。市街は、道路整然、建築高壯、神社、寺、教會、公會堂、皆完備してゐる。星ヶ岡は、天然の美に加ふるに、滿鐵會社の至れり盡せりの設計である。すべて新開地は、内地の發達の基礎の上にたつて、

内地の理想を實現するものである。三尺の小路、茅葺の屋根を殘す内地は、發達の歴史を表す所とすれば、此處は理想をたゞちに實現したものである。そこに過去がない。完全は完全であるが奥行がない。人間には過去は常にはなれぬなつかしものである。

七月三十日

早朝に宿つてゐる大連女學校の後の、南の麓の明治神宮に參拜する。今日此處に、この社に詣でるとは何たる感慨無量の事であらう。こんな早い中から、御社の前にさまでよい人とも見えぬ人の一心にぬかづくを見て、しみじみと、我が國情の美しさを思つた。

「私共何の幸を得ましてか、君の御稜威に浴して此處に御社に詣でる光榮をもちました。どうぞ、ふつゝかな身を以つて、君が御民を敎育する大任をもつてをります私共にお力をお與へ下さいませ。」と祈つた。

この日も諸所方々の見物に身體は綿の如く疲れた。

電車の中は勿論説明も夢心地にきく。眠る事と飲む事ばかり思ひ續けながら、きらきらする夏の陽を浴びてアスファルトの町を行くのも辛い事であつた。

けれども今日は大へんうれしい日であつた。

午後から滿鐵會社の方々が大和ホテルに私共を招待して下さるといふので、一行は大喜び、お湯に入るやら、東京から御持參の外出着をきかへるやら、日やけを氣にするやら、さすが我が校の生徒も女らしい所をあらはす。

一同大元氣。支那馬車で、雨をおかして、ホテルへと出かけると、法貴樣、岡本樣、林樣、御繁務の手から態々御出馬になつて、おもてなし下さつた事は、今更感謝にたへない。つゝましやかに、ズラリとならんで、御手厚い茶菓の饗應をうけたのも、わすれられない事である。やがてエレベーターで、屋上庭園に出た。前關東都督子爵、大島大將の鑄像、屹立する壯觀を眼下に見、而かも、かく隆々發展しつゝあるのをみれば、うれしくてたまらない。げに今も瞑目して、このあたりを思ひ浮べると、この氣持のよい、又、奥行のある大連全市を見下した得意の念が、胸にせまつてくる。かくて、しばし茫然と

して、みとれて居たが、突然、雨が降りはじめたので、つきぬたのしみをのこして、一同わかれをつげた。しかるに、午後七時から、又もや同所で、在大連の櫻蔭會員の方々が、私どものために、歡迎會を催して下さるとの事で、一同のよろこび、たとへるに物なかつた。前とおなじ室で、三々五々、圓いテーブルをかこんだ。各卓に櫻蔭會員の方が、一人づゝ入られたのは、誠に嬉しい御氣付であつた。おもへば、ふしぎである。幾百里の土地、しかも、ヤマトの名のつく洋館に於て、同校出身の方々と、かくまで、うちとけて何のへだてなく、物語りするとはおもへばなつかしい、うれしい、又、ふしぎではあるまいか。快談暫くにして、やがて復、屋上庭園にのぼつた。折から吹き來る風もやはらかく身にせまる。晝にもまさる夜の市中、幾多の電燈は日本文明を照して居る。

七月三十一日

今日は暴風雨の爲に、出帆見合せとて、又市内見物と決定した。林樣の御好意によつて午前十時頃から滿鐵圖書館を拜見する内容形式共に完備したものと見られて羨しく床しく感ずる。

滿洲中央試驗所參觀、これは滿洲に於ける殖産工業並に、衛生上の試驗研究をも併せて、汎く一般の依頼に應じて、分析試驗及鑑定をさせるため、關東都督府の設置にかゝり、明治四十三年滿鐵會社之を繼承して、今日ます〳〵研究の歩武をすゝめて居る。

夜又々、ヤヤトホテルで、晩餐會を催し特別に御好意を蒙つた二三の方々をも御招待申上げた。設備其の他萬端頗る心地よく行届けるは嬉しきところである。「東京にも一寸無いかも知れません」とは其の時のある御客樣の御自慢であつたが、或は然らんか、主客共にテーブルスピーチ盛んで時の過るのもわすれて與じたが、十時頃こゝを出て支那芝居をのぞく爲に出かけた。ヂャン〳〵ピー〳〵ドン〳〵の中の騷しく、奇形のをかしさ、しかも金銀燦爛たる裝のまばゆさ、誠に奇妙といふべきか活躍せる役者、拍手喝采せる觀客。觀劇スタイルの面白き、殊に怪しい煽風機など、何れも話の種となるものであつた。所謂妙味を味はずして十一時茲所を出て歸宿した。

八月一日

今日はいよ〳〵乘船として、朝からいそがしい。入れては出し、出しては入れ、あまり慾ばつた土產、こゝにいたりて、ほとほと困じはてた。矢部先生と相澤氏とは、各別行動をとられることになり、急にさびしく感ぜられる。あまつさへ、朝からの雨だつたので、一同馬車に乘る。わづかの滯在とはいへ、何と、大連はふかく私共に印象されたところであらう。實にのんびりとしかも旅の興味を味つたのは大連である。過にしことをかへりみれば、うれしい事ばかり。この土地をはなれるのがしのびない。馬車はすゝみつゝある。車道のマカダム式鋪礫道は雨にぬれてあはい光を放つて居る。アカシヤの並樹はいよ〳〵綠をなして居る。今日の大連は靜肅にとざされて居る。とまもなく、埠頭に馬車はつく。船は横づけにされて居る。たいちゆう丸と白い字であざやかに書いてある、私たちはこの船に乘るのである。

ちやうどこの時、校長先生も御みえになつて私どもを送つて下さる。林樣、櫻蔭會員の方々雨中をわざ〳〵お見送り下された事感謝の言葉もなかつた。鐘が鳴る見送りの人々はたちのく、錨はあげる。船は汽笛とともに靜に埠頭をはなれた。校長先生、矢部先生……あとのことばは出ない、林樣御きげんよろしうと口ごもる。願はくば日本迄諸先生御一所にとねがはぬものはない、あふれ出る涙をたゝえて……先生の御姿ははや見えない。白波にたのしかつた大連の思をのこしながら、一歩一歩この地をばはなれる時御國に歸るうれしさと、今のさびしさと、こも〳〵心にひらめく。と今迄になく船はゆれ出した樣におもはれたので、われさきにと三等の室にころげこむ。

八月二日

朝はやく起きるものもない。枕をならべながら、たゞ過し數々を語り合ふことしばらく。午前十時頃成田先生がわざ〳〵この室にいらしつて、矢部先生からの電報をみせて下さる。「ブジノコーカイヲイノル」あゝいかに私どもの小さい胸がおどつたであらう。いかに私どもを元氣づけた事であらう。電報をとりまき、一同感謝の涙にむせぶ。やがて一同甲板に出かける。滿目青々たる海原を白い波をはきながら、すゝみゆく船も勇ましい。しめつぽい潮風は、ほつれ毛をなぶつてゆく。夏なほしらずとは甲板である、夏の極樂は甲板である。今夜は、客の慰安にとて、船中のボーイの芝居があり意外の興味を覺えた。

八月三日

玄海灘何と靜かであらう。朝霧も漸く晴れてたゞ見える青海原、天も靜か、水も靜か。篠田先生(旅順の高等女學校々長)も玄海の今日ほど靜かなのは實際まれであるとおつしやつた。御國へ歸るうれしさに人々の顏もかゞやいて居る。われこそは眞先にと望遠鏡をしつかりにぎつて居る人もある。誰かが「あゝ陸が」とさけべばなるほどかなたに母國は横つて居る。私どもは子供が母を見つけたやうにむやみにうれしがる。

十時といふに、いよ〳〵關門海峽に入つた。甲板よりながめた日本の國土、否母國の土地、滿山綠におほはれたこの土地、胸おどり、手の舞ひ足のふむところをしらずとはこの時である。嗚呼自然美〳〵この日本の自然美こそ、日本の日本たる所以ではあるまいか、ながい歷史をもつ支那、一大公園に外ならぬ青島市の、いかで、わが國にまさるべき、とつく〳〵御國自慢が出た。手をにぎり、皆々この母國のためにと誓ふ。

門司の港につき、生徒六人はこゝに上陸された。殘るは再び、內海の勝景を稱へた。

午前十一時神戸着、一同上陸、心配した稅關も無事通過案ずるより生むが易いの喩にもれなかつた。更に電報は故鄕の空へと飛んだ。

おもへば今や歐洲は戰亂の巷である。時局ますます重大である。近くは我國に於ても、物價暴騰並に輿論憤々たる時にあたり、かくも幸福に、かくも希望に滿ちた旅行を無事に終へることのできたのは、偏にこの御聖代の恩澤に浴するため、且は家の恩、校長其他の師の君たちの、親にもまさる御恩の程、今更ながら感謝のことばもしらない。又櫻蔭會員の方々には至る所で、赤誠のあふれた御歡待を蒙り旅に在ることを忘れるほどであつたのは　更に青島、濟南、旅順、大連、における當局の方々の、いかに私どもの旅の心をおどらせたことであらう。特別な御

好意は謹んで感謝申上る次第である。内地に於ける沿道の諸學校の方々にも併せて、御禮申し上げたい。更に更に大書して感謝の辭を呈さねばならないのは、山崎直方博士が、西京丸其の他に於て恰かも十年の師弟の如き、温き親切なる御指導をたまはつた事である。永く山東旅行の思出と共に、寫生ブック、日記帳、旅行記等に於て記念すべき事である。

この約一月の旅行に於て、益せしところを擧げつくす事が到底出來ないが、海にしたしみ、海路に怖れず、外土に感興をいだき、更に遠隔の旅行を欲すといふ如きは、女子として、誠によい結果を見た事と、我ながらよろこばしい極みである。

文科三年日光旅行

大正七年十月二十七日未明に上野を出發した日光行列車は、我等一行の喜を載せて幾年來の憧憬の的へと疾走した。しらしらと明るみ行くにつれて、雨模樣が見えてきたが、日光旅行には雨がつき物と何時となく聞かされてゐたので、覺悟もあり、準備もあり、失望はしなかつた。やがて雜木林の紅葉を洗つて落ついた雨が降りだした。日光に近づくにつれて彼の有名な老杉の並木が見られた。汽車はその並木の街道を横ぎつて、小綺麗な明るい停車場に着いた。時は十時半頃であつた。

初めて見た日光の町は、實に汚ないと思つた。しかし電車が進むにつれて、此感じは消えて行つた。町が盡きると、神橋の架せられた溪流が顯はれて來た。皆は東照宮拜觀の爲、此處で降りた。神橋の所で迫つてゐる谷が向ふに開け、上流の方にも、下流の方にも、白雪を頂いた山々が見えた。日光のシムボルの如く、目も覺めるやうに鮮かであるべき神橋は、修繕中で惜しい事にもよく見えなかつた。

參道と札が立てられた杉並木の坂を登りきつてから拜觀切符を買つて、山内に入つた。先三佛堂（輪王寺金堂）に入つて行く。大きな紋付羽織を着て、小旗を持つた案内者が、此處で先口を開く。彌陀を中央に、右に馬頭、左に千手觀音の三佛が安置されてある。堂前の大きな糸垂櫻の傍を通つて、大師堂前に出る。泉石の配置の綺麗な庭があつた。左して、相輪

塔の下に立つ。東照宮の鬼門に當り、鎮護の爲に建てられたものと云ふ。其處を下りて、本通りに出る。やはり立派な杉並木があり、其の正面に東照宮の堂守が有るのであつた。

石の大きな華表をくぐらうとした時に、黑田長政が筑前から石を運んで奉つたものと、案内者が說明した。左に濃綠の中に、丹青を凝らした五重の塔が見えた。雨の爲に、その色彩が一層はへて見えた。水盤所では「まあこんな處まで、こんなに立派にね！」と、つぶやく人もあつた。御手洗器からは、清水が絕えず漲り落ちてゐた。南蠻鐵の燈籠を見、唐銅の華表を通ると、飛越の獅子がある。諸大名の献納した燈籠が澤山ある。そして其の前には、陽明門が花を開いたやうなきらびやかな姿を見せて立つてゐる。

此前を通つて、先に本地堂に入つた。權現樣のお守り本尊藥師佛を祀つてある所。内陣に入つて手を打つて「ロ、、、、」と響く鳴龍の聲を聞いた。天井に繪いた大龍の頭の下で、打つたのでなければ、鳴かないと云ふのであつた。

それから陽明門の前に戻る。三門樓門入母屋四方軒唐破風の建築は、雨の中にひとしほ輝いて立つてゐた。實にこれなら、日を暮して見續けても、飽きまいと思つた。十二本の中、一本の柱は逆ばしらと云つて、地紋の渦流が皆下をむいてゐる。凡て調つたのは魔がさす故に、魔除けの爲にかうしたのだと案内者は云つた。先生は「し損ひだらうよ」と云つて笑つてゐらした。「東照大權現の御額の字は後水尾天皇の御宸筆。天井の八方睨の龍は狩野探幽の筆、左右の御廻廊は百間」などと、案内者の雄辯が流れる。御門は勿論、廻廊の極彩色彫刻も、實に偉觀また美觀であつた。其の奥に、四方大唐破風で二脚門なる唐門がある。一層陽明門よりは小さく、美しさも劣らず、殆んど手に載てせ見る精巧な細工物が、お菓子のやうな氣がした。陽明門の彩色とりどりに、華やかなのに比して、あつさりした色彩と、金金具の輝きとがまた美しい。

此處を入ると拜殿になる。其の裝飾がまた、美をつくし、麗をきはめたと云ふ感じを起こさせる。拜殿からお石の間、それから奥の院に續いてゐる。座つて神主の說明を聞いてから、此の善美をすくした